

提喩性と「強度」の概念

ーロラン・バルトにおける恋愛のディスクールの問題ー

金谷 壮太

1. はじめに

ロラン・バルトの活動において、「中性的なもの (le Neutre)」という概念の重要性は疑いを容れない。コレージュ・ド・フランスでのバルト自身の講義がそれを例証しており¹、彼の様々な著作においてこのテーマが見出されるのもたしかである²。この「中性的なもの」という概念は、「範列 (paradigme) すなわち「二項対立」とは異なる次元を指すものであり³、その重要なモーメントのひとつとして「強度 (intensité)」という概念を挙げることができる⁴。たとえば頭痛には、局所的な強い痛み (苦痛) と全体に及ぶような弱い痛み (不快) というように「強度」すなわち「程度の差異」が存在し、この強いか弱いかという程度に基づく「差異」は、二者のあいだの「対立」ではなく「ニュアンス」を示している。

それと同時に、バルトがその活動のとりわけ後期に断章形式で著作を発表したことは良く知られている。彼は個々の断章それ自体が持つ「濃縮性 (condensation)」あるいは「密度の高さ」に対してかなり意識的であったし⁵、またそれ以上に重要だと思われることは、「中性的なもの」というテーマに直結する「ニュアンス」の問題は断章形式を通してこそ顕在化するとバルトが考えていたことである。たとえば、俳句 (バルトが好んだ断章形式) を通して主体はその都度日常生活のなかのある特別な瞬間に関係づけられ、その結果としてその都度個別的な「ニュアンス」が立ち現われるというように⁶。それゆえ断章形式を通して顕在化する「強度」(「程度の差異」という概念は、とりわけバルトの後期の活動において重要な位置を占めているように思われる。

われわれはこの問題に対して、提喩性という観点からアプローチする。類と種のあいだの包含関係において典型的に見られるとおり、提喩は「一般化」と「個別化」に焦点を当てるレトリックであると言える。また提喩性は、たとえば『S/Z』におけるように、バルトの文学理論において換喩性と密接に絡み合いつつ存在している⁷。本稿の目的は、この提喩性が断章形式と「強度」の概念のつながりに対する理論的支えになっていることを証明することである。そうすることによって、提喩性

が持つ理論的射程を、断章形式と「中性的なもの」の問題圏のなかに位置づけることを試みる。

本稿では、断章形式で構成されているバルトの『恋愛のディスクール・断章』（1977年）を対象にしてこの問題について検討する。また、この著作の元になった彼の高等研究実習院でのセミナーの記録『恋愛のディスクール』（1974-1976年度のセミナーの記録で2007年に刊行⁸）は、とりわけ方法論上の問題を考察する際に有益な手がかりになるだろう。

2. 恋愛のディススクールをめぐる方法論上の問題

近年刊行されたセミナーの記録『恋愛のディススクール』の特徴のひとつとして、方法論上の問いに多くの労力が割かれていることが挙げられる。そこでは、1977年に刊行された著作のヴァージョンにおいては控え目に冒頭の数ページのなかで提示されていた問題設定が、非常に周到かつ緻密に練り上げられていることがわかる。とりわけ「フィギュール」の問題に関しては、その性質・配列方法・理論的背景が何度も繰り返し述べられている。

周知のとおり、『恋愛のディススクール・断章』においてバルトは、彼が「フィギュール」と呼んだ各項目ごとに断章形式を連ねていくという執筆スタイルを採用した。この「フィギュール」とは「文彩」（レトリック）のことではない。それは、恋愛のディススクールを静的な分析対象ではなくある種の動的な「場」として捉えるための、すなわち恋愛をめぐる主体の欲望と「言表行為（énonciation）」の関係性をメタ言語を用いずいわば「そのままに」捉えるための、「型」（つまりそのように捉えられた恋愛のディススクールの「要素」）である。「フィギュール」とは要するに各断章の「まとめり」のことであり、ゆえにそれは各断章の「テーマ」を端的に示していると言える。

バルトは恋愛のディススクールに対して、メタ言語を用いて分析する態度を徹底して拒否し、各断章を統合するという手続きを取らなかった。この意味で各断章は、いかなる恋愛論あるいは「恋愛物語」や「恋愛哲学」をも形成しない。「テキスト」の複数性と同様に、恋愛のディススクールの多様性は、常に動的な意味生成の次元に属している。具体的には、バルトは各フィギュールのあいだにいかなる理論的根拠も見出せないことを旨とした、と言える（「いかなる論理もフィギュールとフィギュールを結合することがなく、その隣接性を規定することもない」⁹）。各フィギュールを連結し各断章を統合する働きを担うような何らかの構造や序列、あるいは包括的な意味は存在しない。ただし周知のとおり、これは完全な無秩序を意味する

のではなく、実際にはアルファベットによる順序というフィギュールの配列方法が採用されているし、また当然のことながら断章群をフィギュールというかたちで命名するという作業工程も存在する。ただいづれにせよ、各フィギュール（また各断章）は何らかの論理によって統合されることがないという意味で、ある包括的な意味による「分類」から逃れていると言える。

ところで提喩性とは、包含関係に基づく以上、「分類」という作業と無縁ではない。とりわけカテゴリー間の包含関係においては、上位概念と下位概念のあいだで常に「分類」が行なわれている。セミナーの記録『恋愛のディスクール』を参照すれば、バルトがこの包含関係の「魔」とでも呼べるような事象に対してかなり意識的であったことがわかる。たとえば、苦悶・破局・奈落の底・衰弱といった恋愛主体の様々な状態を「不幸（な人）」というひとつの類に統合する誘惑は容易に想像できる。バルトはこの誘惑に対し、恋愛のディスクールにおける類と種の特異な関係性を述べつつ（「われわれにとって、構造的に言えば、類は種と同一の面にあり、[...] 類は種の上位にあるのではなく、種に並置されている。」¹⁰（強調原文））、各フィギュールがいかなる概念にも還元できないことを強調している。

それゆえ提喩性と断章形式は、もしフィギュールを「分類」という観点に立つならば、相容れないように見えてもおかしくはない。しかしながら、この両者の関係には別の側面が存在する。セミナーの記録においてバルトは、フィギュールの性質について次のように書き残している。

シニフィアンス [意味生成性]、それは、差異、襞、起伏、凹凸、である。「フィギュール」とはそういったものである。すなわち、繊細で、個別的で、軽薄で、子供じみた特徴のことであり、「想像的なもの」の発作である [...]。¹¹（強調原文）

われわれが注目すべきなのは、フィギュール（各断章の「まとめり」）が、「襞 (pli)」・「起伏 (relief)」・「凹凸 (aspérité)」といった「奥行き」を喚起するイメージとともに、「差異 (différence)」という概念に結びつけられていることである。つまり断章形式は、何らかの「物語」や「哲学」には統合されない「ニュアンス」という意味での「差異」を具現化すると考えられるのである。ゆえにここで述べられている「差異」は、断章による意味の「奥行き」、あるいは二項対立を示す「範列 (パラディグム)」の次元には属さない「差異」であろう。

さらにフィギュールの性質について、バルトは次のようにも述べている。

フィギュールにおいて関与的なもの、それは、フィギュールのなかにあつて、（「フィギュールの」聞き手に対して）異なる在り方をすることを余儀なくさせるものである。すなわち、対立することではなく、ニュアンスを与えることや微妙な色合いをつけること（タピスリーのように）、つまり調和すると同時に差異分化すること。¹²（強調原文）

このように、「中性的なもの」という問題にもつながるような、「対立」ではない「差異」の在り方（「ニュアンス」）の重要性が記述されていることがわかる。ここからわれわれは、次のような観点を導き出すことができるだろう。つまり、フィギュールのなかにもとめられる断章はそれぞれ、「ニュアンス」というかたちで「差異」を具現化しているのではないか、さらに言えば、「中性的なもの」という問題から、この「差異」は「強度」すなわち「程度の差異」を指し示しているのではないかと。言い換えれば、バルトはこの「強度」という概念を問題化するために、いかなる包括的な意味にも還元されないエクリチュールのスタイルすなわち断章形式を採用したということである¹³。

たしかに各フィギュールを統合する包括的な意味というようなものは存在しない。隣接性にしたがって換喩的に配置されている各断章は、「統合」や「分類」という点においては包含関係としての提喩的な特徴を持つものではない。しかし提喩性は、もしそれが「強度」（程度の差異）という概念に関係するのであれば、バルトの方法論から必ずしも除外されているわけではないと言える。それゆえ問題になるのは、断章形式を通して知覚される「程度の差異」と提喩性のつながりである。

この観点を補強するために、「恋愛のディスクール」のセミナーと著作の両方に共通している理論的基盤を指摘しよう。恋愛のディスクールに対するバルトの作業は、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』とプラトンの『饗宴』を主要なコーパスとする一方、理論的基盤として、精神分析（とりわけラカンの理論）とニーチェ（とりわけドゥルーズによる）が絶えず参照軸として存在していることが挙げられる。そのなかでもセミナーが進行するにつれ、精神分析からニーチェへの傾斜が深まっていることが確認できる。セミナーの目的が述べられた次のような言明は引用するに値するだろう。

われわれのねらい？一般性や抽象化（恋愛のディスクールに対する）を記述することではなく、言語活動が流れる空間や場、また言語活動の（活きた、すなわち熱烈な）足跡や練成、言表行為、つまり欲望や「想像的なもの」にしたがって話す主体の位置の流動的な位相を記述することである。個別的なもので

も一般的なものでもなく、流動するもの、可動するもの、繊細なもの、すなわち複数的なもの（差異の永遠回帰）、要するにある量の「テキスト」（あるひとつの作品ではなく）[をねらいとするのである]。¹⁴（強調原文）

「差異の永遠回帰（*éternel retour de la différence*）」を追求しようとするこの言明は、断章というかたちで具現化される「程度の差異」の重要性を示唆しているように思われる。というのも、少なくともバルトの考えでは、フィギュールは相互に関連しあうものであり、その意味で反復していると言えるが（たとえば「イメージ（*image*）」と「反響（*retentissement*）」のように近似的な性質を持つフィギュールが存在する）、それは、まさに「ニュアンス」が異なるかたちでの反復を指し示しているからである。このように、恋愛のディスクールをめぐる方法論上の問題からわれわれは、断章形式を通して顕在化する「強度」（「程度の差異」）という概念に到達するのである。

3. 一般化と個別化がもたらす「意味の強度」

かつてグループμが『一般修辞学』（1970年）で行なった提喩に対する理論化において明確に示されているとおり、提喩は「一般化」（「人間」を表わす「死すべきもの」、「イエス・キリスト」を表わす「救世主」と「個別化」（「偽善者」を表わす「タルチュフ」、「船」を表わす「帆」）という二つの様態を取る。「一般化」においてはたとえば「人間」から「死すべきもの」へと、「個別化」においては「偽善者」から「タルチュフ」へとというように、平たく言えば意味の移動が生じている（意味の移動を伴うため、提喩は隠喩や換喩などとともに転義法のうちのひとつなのである）。

提喩とは、たしかに隠喩や換喩と比較すれば、しばしばレトリックとしての効果が薄いことを認めなければならない（かつて提喩のレトリックとしての価値が疑義に付されたこともあった¹⁵）。しかしそれゆえにこそ、提喩においては常に、出発点となる項（先の例における「人間」や「偽善者」）と到達点となる項（「死すべきもの」や「タルチュフ」）の両者を意識的に把握している必要があるということである。言い換えれば提喩は、出発点となる項と到達点となる項を同時に存在させておき（両者をいわば「並置」しておき）、そのうえで一般化と個別化という手続きに目を向ける必要があるということである。その結果として、提喩においては出発点となる項と到達点となる項のつながりが「包含関係」に基づいているのだと言える。この意味において、提喩という文彩の原理は、ある対象を一般化ないし個別化

するという機能に存しているのである。

この一般化と個別化という提喩のふたつの様態は、それぞれ「緩叙法 (litote)」と「誇張法 (hyperbole)」というレトリック (あるいは文体的特徴) に結びついている。この見解は、ジェラルド・ジュネットの次のような言明にある程度支えられている。引用元は、文体論の分野において名高い彼の「文体と意味作用」(1991年、『フィクションとディクション』に所収) のなかの、提喩と「緩叙法」ならびに「誇張法」とのあいだのつながりに関して述べられた脚注の部分である。

[緩叙法と誇張法が提喩の] 述語の変異体 [述語のレベルに拡張されたヴァリエーション] であるというのは、[まずは] 緩叙法が述語の度合いを一般化する提喩として記述されうるという意味においてである。すなわち、私は君を少しも憎んでいないは、「私は君を愛している」を一般化している。なぜなら、「愛する」(強い程度) が「少しも憎んでいない」(弱い程度) に包含されているからである。逆に、誇張法は、同様の表現において、個別化の度合いの提喩である。すなわち、「あなたは馬鹿ではない」を表わすあなたは天才的だ、というように。なぜなら、天才的であることは馬鹿でないことのひとつの個別的ケースだからである。¹⁶ (強調原文)

ジュネットによれば、緩叙法は一般化の提喩として、すなわち強い程度から弱い程度への移行を具現化する文体的変形として捉えることができ、誇張法は個別化の提喩として、すなわち弱い程度から強い程度への移行を具現化する文体的変形として捉えることができる。ここでわれわれが目すべきことは、「一般化」が「強い程度から弱い程度への移行」、「個別化」が「弱い程度から強い程度への移行」と定義づけられているという点である。このように、提喩は「強い程度」と「弱い程度」という「程度の差異」を対象にしているのであるが、これはつまり、その「強度」というものが「一般化」と「個別化」という現象を通して把握されうるということを意味している。このジュネットの見解は、バルトが断章形式を用いて問題にしている「ニュアンス」の次元を「一般化」と「個別化」が織りなす「意味」の「強度」(程度の差異) として知覚する可能性を示しているという点で、理論的に大きな重要性を持っているとすることができる。

さてこれから、このパースペクティブのもとに、「恋愛のディスクール」の断章群を通して知覚できる「強度」(これは常に強いか弱いかという「程度の差異」を意味する) という概念について検討しよう。具体例を取り上げる前に、「恋愛のディスクール」におけるこの概念の重要性を再確認しておきたい。

愛について書こうと望むことは、言語活動のぬかるみ〔／浪費〕に立ち向かうことである。この狂乱の地帯において、言語活動は過剰であるとともに過小であり、それは（自我の際限のない拡大と感情におぼれることによって）度を越したものであると同時に、（愛が言語活動を矮小化し平板化する助けをする諸コードのために）貧しいものである。¹⁷（強調原文）

ここでは愛をめぐる「書く」ことに伴う言語活動の「浪費（gâchis）」について述べられており、この場合、言語活動は個別的な自我の活動のために「度を越した」（「強い程度の」）様相を呈するとともに、愛を語る手段となる一般的なコードのために「貧しいもの」（「弱い程度のもの」）として存在している。個別化の働きは過剰さ（「強い程度」）を伴い、一般化の働きは貧しさ（「弱い程度」）を伴うというわけである。このように考えれば、諸々の「恋愛のディスクール」の内容は、それを表現する断章群という形式を通して、個別化というかたちで過剰さを示すような「強い程度」と、一般化というかたちである種の貧しさを示すような「弱い程度」というように「強度」（「程度の差異」）を伴うことがわかる。また先のジュネットの見解を援用すれば、その「強度」は、「恋愛のディスクール」の諸々の断章（つまり諸々の断片が持つ「意味」）が「誇張」されていれば強められ、それが「故意に控え目に」述べられていれば弱められると考えることができる。

それでは具体例について検討したい。まず「手紙（lettre）」というフィギュールであるが¹⁸、このフィギュールはその「定義」（各フィギュールの冒頭に付された短い説明文のことで、バルトはこれを「梗概（argument）」と呼んでいた）からして、一般性（コード）と個別性（主体）のコントラストを形成していた（この「手紙という」フィギュールは、空虚である（コード化されている）と同時に、表現力豊かな（欲望を表わしたいという願望が込められている）恋文というものに特有の弁証法を対象にしている）¹⁹。

このフィギュールの最初の断章でバルトが述べるところによれば、ウェルテルがシャルロッテに送った手紙は、愛の手紙にふさわしく「私はあなたのことを思っている」ということを意味しているが、実際にはこの命題が「誇張」されて散りばめられるわけである。すなわち、「あなたのことを思うのはなんとという喜びだろう！」、「あなたなしではひとりぼっちに思える」、「わたしたち二人がもう一度会えるように願をかけている」、などというように。「あなたのことを思うのはなんとという喜びだろう！（Quelle joie de penser à vous !）」という言明は、「あなたのことを思っている」という命題のひとつの個別的ケースである。ゆえに、「あなたのことを思うのはなんとという喜びだろう！」という言明（強い程度の「意味」）は、「あなたのこと

を思っている」という命題（弱い程度の「意味」）を、その「内容」のレベルで（断章という「形式」それ自体のレベルではない）個別化していると言える。このようなかたちで、断章形式を通して具現化されている「恋愛のディスクール」の「内容」に伴う「強度」（「程度の差異」）を知覚することができる。さらに踏み込んで言えば、「恋愛のディスクール」の「内容」が持つ「強度」とは、一般化と個別化というかたちで現われるディスクールの「意味」が持つ「強度」にほからないことがわかるだろう。

次に「口論 (scène)」というフィギュールを見てみよう²⁰。このフィギュールの2番目の断章において述べられているとおり、口論はひとつの事実あるいは決定をめぐってなされるものである（シャルロッテへのウエルテルの訪問の間隔を空けることをめぐって両者が口論する）。シャルロッテは「訪問の間隔を空けてほしい」ならびに「ウエルテルの情熱を受け入れることができない」という命題を一般論に属する表現を用いて以下のように伝える、すなわち「あなたが私を欲するなどありえないのですから (C'est parce que c'est impossible que vous me désirez)」。この表現で示されるディスクールの「内容」は、それが「故意に控え目に」述べられているという点で、「あなた (ウエルテル) の情熱を受け入れることができない」と直接述べることには比べれば、弱い程度の意味に属していると考えられる。さらに、「あなたが私を欲するなどありえない」という言明は、「あなたの情熱を受け入れることができない」という命題を一般化したものであると捉えることができる。なぜなら、「あなたが私を欲するなどありえない」という言明は、「友人は恋愛の対象にはなりえない」（ウエルテルは友人であるシャルロッテを愛するはずがない）という一般論に基づくからである。

この「口論」というフィギュールの5番目の断章では、シャルロッテに対するウエルテルの「脅し (chantage)」について述べられている。バルトによれば、「もうすこし休ませてください、なにもかも片がつくでしょう (Laissez-moi encore un petit peu de repos, tout s'arrangera)」というウエルテルの発言が意味するところは、「あなたはもうすぐ私から解放されます」ということである。「なにもかも片がつく」という発言が「脅し」であるからには、この場合には「私から解放される」という命題が強められているのだと言える。言い換えれば、この「脅し」が「私から解放される」という命題を伝達するひとつの個別的ケースであるという点で、「脅し」の強い調子を伴った「なにもかも片がつく」という発言が「解放」という命題を個別化しているのである。

さらに、一般性と個別性の働きによる「程度の差異」は、愛情の対象（たとえばウエルテルにとってのシャルロッテ）について語る断片的なディスクールにおいて

も存在している。「うわさ話 (potin)」というフィギュールの2番目の断章において、バルトは、ウェルテルがシャルロッテについてのうわさ話を聞く様子を問題にしている。たとえば「シャルロッテはすでに婚約している」という言明は、うわさ話にふさわしくシャルロッテを一般論のレベルで語っている（「うわさ話は軽薄で冷淡であるゆえにある種の客観性を持つ」²¹⁾。「シャルロッテはすでに婚約している」という「意味」の「強度」は弱いのである（つまりそれはシャルロッテについての単なる客観的な「情報」にすぎない）。

これと比較すれば、愛情の対象を語る際の「素晴らしい」という言明が持つ「意味」の「強度」は強いということがわかる。「素晴らしい (adorable)」というフィギュールの3番目の断章でバルトが述べるところによれば、愛情の対象を「素晴らしい」と表現することは自分自身の欲望の特殊性を示すことにつながる（「素晴らしいが意味するのは、これこそが唯一無二であるものとしての私の欲望である、ということである」²²（強調原文））。愛する人の身体のある部分（たとえばバルトが身体の「髻」と呼ぶところの髪の毛）を「素晴らしい」、あるいはさらに、「これなんだ！まさしくこれなんだ（私が愛しているのは）！（C'est ça ! C'est exactement ça (que j'aime) !）」と表現することは、明らかに一般的なレベルには属しておらず、自分自身の欲望の特殊性を示すほどに個別的なレベルに属しているのである。

また「(シャルロッテは) 婚約している」と「素晴らしい」という二つの表現は、意味のうえで互いに対立しているわけではない。両者は「対立」ではなく、「ニュアンス」としての「差異」を示している。それゆえここでは、一般性と個別性のあいだの「差異」は、「(二項) 対立」に還元できない「意味の強度」として存在しているのだと言えるだろう。

したがって提喩性はここで、断章形式を通して具現化される「意味」の「強度」に焦点を当てる理論的装置として機能していると言える。このことは、断章形式それ自体に「強度」が存在することを示しているのではない。そうではなく、あくまでもバルトが断章形式を用いて問題化した「強度」（「程度の差異」）の概念が、諸々のディスクリールの断片が持つ「内容」を通して、提喩性という観点から把握できるということを示しているのである。一方のものが他方のものに単純に包含されるということではなく、また断章群が何らかの包括的な意味に統合されるということでもなく、一般性と個別性が織りなす差異として「強度」の概念が前景化されているということが重要なのである。そのような「強度」は、諸々の断片（細部）を詳細に辿ることによってようやく知覚できるような「ニュアンス」なのである。

4. 比類なき「フィギュール」、Je-t'aime

われわれは、提喩性と『恋愛のディスクール・断章』における断章形式のつながりに関して、「強度」（「程度の差異」）という概念を導入してこの問題にアプローチしているわけであるが、「私は・あなたを・愛しています（Je-t'aime）」というフィギュール（これは前述したように各断章の「まとまり」でありまた各断章が示す「テーマ」でもある）において、バルトは次のように述べている。

私は・あなたを・愛していますにはニュアンスが存在しない。それは、説明、修正、程度の差、ためらいを消し去る。ある意味で一言語活動の途方もない逆説である—、私は・あなたを・愛していますと言うこと、それはいかなる言語の劇場も存在しないかのようにふるまうことであり、またこの語は常に真実である（この語はその発語行為のほかにはいかなる指示対象をも有していない。すなわち行為遂行的なのである）。²³（強調原文）

「私は・あなたを・愛しています（Je-t'aime）」という発言は「行為遂行的な（performatif）」ものであり、また一度愛の告白をしてしまえば同語反復にすぎないのであるから、「恋愛のディスクール」においてはいかなる解釈も分類も受け付けないような特殊な発言である。その意味でこの発言には「ニュアンス」も「程度の差」も存在していない。いわば魔法のような言葉であり、このフィギュール（テーマ）は「強度」という概念と相容れなくとも考えられなくもない。実際このフィギュールは、作中で最も長い断章群を形成していながら、精神分析とニーチェへの参照が複雑に入り込んでいるために他の断章群にはない難解さを示しており、理論的アプローチを容易には受け付けられないと言える。

しかし同時に、バルトがドゥルーズ経由のニーチェを援用して述べているとおり、この発言は能動的な力を有しており、「力への意志（volonté de puissance）」の様態として「差異の産出（production de la différence）」を行なうものと見なされている²⁴。またセミナーの記録『恋愛のディスクール』においては、この発言によってもたらされる「差異」は、ニーチェ的な「肯定」という概念が持つ「差異」であることが示唆されている²⁵。

ゆえに「私は・あなたを・愛しています（Je-t'aime）」という発言の特殊性を把握するためには、ドゥルーズのニーチェ論を参照する必要がある²⁶。ドゥルーズによればディオニュソス的な肯定は、「肯定」に対して「肯定」という二重の「肯定」というかたちを取る（能動的な生成状態に置かれた「肯定」を捉えるためには、

それを「肯定」することによって対象として存在させなければならない)。この二重の「肯定」は、単に現実の状況を引き受けることを意味するのではなく、人間の力を超えるような（すなわち「超人」につながるような）射程を持ち、現実の引き受けから生を解放し、生を能動化する新たな価値を創造する機能、すなわち「反動的な力（force réactive）」を「能動的な力（force active）」に価値転換する機能を有している。このような能動性への価値転換は永遠回帰という概念を必要とするのであるが、それは永遠回帰が生成を再生産することによって能動性を産み出すためであり、また永遠回帰がニヒリズムの極端な形式にほかならず、その結果としてニヒリズムが超克されるからである（反動的な力が極端であれば、つまり強ければ強いほどかえって力の質という点では能動性を獲得することになり、その結果として反動的な力が能動的な力へと質的に転換されニヒリズムそのものが自己破壊に陥る）。したがって二重の「肯定」は、永遠回帰を伴ったかたちでニヒリズムを超克するモーメントとなり、またそれゆえ必然的に永遠回帰の原理である「力への意志」すなわち諸力の差異の生成を伴うことになる。

バルトはこの二重の「肯定」に言及することを忘れていない。彼はフィギュール「肯定（affirmation）」において次のように述べている。

恋愛には二つの肯定が存在する。まず最初に、恋する者が相手に出会うとき即座に肯定が起こる。[...] 私はすべてのものに然りを言う（盲目的に）。次に長いトンネルが来る。私の最初の然りは疑念にむしばまれる。[...] しかしながら、私はこのトンネルから抜け出すことができる。[...] 最初のときに肯定したものの、私はそれをもう一度肯定することができる。それを繰り返すことではない。というのも、私が肯定するのは肯定そのものであって、その偶然的内容ではないからである。私は最初の出会いをその差異において肯定する [...]。

27（強調原文）

したがって、「私は・あなたを・愛しています」というフィギュールにおいても、「差異」の概念は保持されている。さらに、この場合の「差異」は、ディスクールの断片という形式それ自体の「程度の差異」なのだと言える。このフィギュールの5番目の断章のなかでバルトが述べるところによれば、「私はあなたを愛している（Je t'aime）」という告白に対する「私も（moi aussi）」という返答は不完全であり、この返答の形式は「もとの発語行為を逐語的に繰り返していないという点で衰えた」²⁸ものである。バルトによれば、完全な返答は、このフィギュールの9番目の断章のなかで述べられているような、「私もあなたを愛している（Je t'aime aussi）」とい

う逐語的な形式を持つものである。このように、恋愛表現の日常的な決まり文句においても（形式上の）「程度の差異」が存在しているのである。

提喩性という見地からは以下の点に注目すべきである。愛の表現として不完全すなわち「言い足りていない」ため、「私も」という返答を、ある種の「緩叙法」（控え目な表現）として機能していると思われ、「私も」（弱い程度）が「私もあなたを愛している」（強い程度）を一般化していると考えられる誘惑を引き起こすかもしれないということである。しかし実際には、「私も」という言明は、「私もあなたを愛している」という言明をカテゴリーの分類に基づいた「意味の強度」という点で一般化（包含）しているわけではなく、むしろ、それは単なる形式上の省略と見なす方が妥当であろう。

このことは、提喩性と「強度」の概念のつながりに対して重要な点を喚起する。つまり、「一般化」と「個別化」というかたちで「強度」を知覚するには、「緩叙法」によるしる「誇張法」によるしる、何らかの意味上の変形が必要になるということである（提喩が意味の移動に基づくレトリックであることからすれば当然の帰結ではある）。「一般化」の場合は、「愛する」を意味する「少しも憎んでいない」（先のジュネットが用いていた例で、この場合には、「少しも憎んでいない」という言明は、「愛する」を意味するひとつの決まり文句、つまり一般的なステレオタイプとして機能しているのだと言える）、「あなたの情熱を受け入れることができない」を意味する「あなたが私を欲するなどありえない」というように、意味上の変形を前提にしている。また「個別化」の場合も、「解放される」を意味する「なにもかも片がつく」、「あなたのことを思っている」を意味する「あなたのことを思うのはなんという喜びだろう！」というように、意味上の変形を前提にしている。したがって、提喩性によって明らかになる「強度」とは、あくまでもディスクールの個々の断片が持つ「意味」の「強度」であることがわかるだろう。

5. 結論

われわれが導入した「強度」という概念は対立ではなくニュアンスの次元に属している。「恋愛のディスクール」をめぐるバルトの作業においては、方法論上の問題においてこの概念が重要な役割を果たしているとともに、まさにこの概念を尊重するために、バルトはいかなる還元も不可能な断章形式というスタイルを採用したと言える。そして断章形式に潜在している「差異」は、提喩性という観点から、すなわち一般化（一般性）と個別化（個別性）のあいだに存在する「意味の強度」として顕在化するのである。提喩性によって明らかになる「程度の差異」は、断章と

いう「形式」それ自体が持つ「強度」ではなく、意味上の変形を伴った断章の「内容」が持つ「強度」であると言える。提喩は包含関係に基づいているが、その理論的射程は、二者を並置したうえでそのあいだに存在する「程度の差異」を明るみに出すことにある。

「強度」ないしそれに基づく「差異」という概念は、思想的にはドゥルーズに負うところが大きいはずである。バルトはこの概念を断章というエクリチュールの形式を通して具現化した（あるいは断章のレベルでこの概念とともに生きた）というところに、彼のいわゆる「モデルニテ（現代性）」への貢献の真骨頂があるのかもしれない。それゆえ、近年刊行が続いているセミナーの記録を含めて、彼の理論的試みの全体を再考するという作業の価値は高いと言うべきだろう。そして提喩性は、断章形式によって具現化される「差異」に焦点を当てる理論的装置としてわれわれの前にある。したがって、断章によって構成されたバルトの他のテキストについても提喩性という見地からアプローチする必要があると思われる。

注

本稿のなかで使用している文献に関して、既訳が存在する場合はそれを参照しているが、引用の訳文はすべて筆者によるものである。

- 1 Roland Barthes, *Le Neutre. Notes de cours au Collège de France 1977-1978*, texte établi, annoté et présenté par Thomas Clerc, Seuil / IMEC, 2002 (『〈中性〉について——コレージュ・ド・フランス講義ノート1977-1978年度 (ロラン・バルト講義集成II)』、塚本昌則訳、筑摩書房、2006年)。
- 2 Cf. Bernard Comment, *Roland Barthes, vers le Neutre*, Christian Bourgois, 1991.
- 3 たしかに「範列」は、「類似と対照に基づいた、入れ替え可能な辞項間の選択的關係」のことを指すため (たとえば動詞「見る」・「眺める」・「観察する」など)、それは二項対立の原理に収まるものではない。しかし、バルトは「中性的なもの」の問題性から、意味を作用する原理として諸辞項の選択的關係を捉えており、ある辞項の「現前／不在」というかたちでの意味の原動力として二項対立を捉えている。また「有標／無標」の二項対立は範列のなかの良く知られた型であるが、この場合には、ある性質 (たとえばSとZの音韻対立なら有声性) の「現前／不在」が問題になっているのだと言える。この観点において範列は二項対立と言い換えられるが、範列に対するバルトのこのような特殊な考え方については別の機会に論じる必要があるだろう。Cf. *Le Neutre. Notes de cours au Collège de France 1977-1978*, op. cit., pp. 31-32 (邦訳16-18頁)。

- 4 *Ibid.*, pp. 245-246 (邦訳331-333頁) . なおバルトは、その「強度」に基づく「差異」を対象にする方法を「ディアフォラロジー (diaphorologie)」と命名していた。
- 5 Roland Barthes, *Roland Barthes par Roland Barthes* (1975), in *Œuvres complètes*, t.IV (1972-1976), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 671 (『彼自身によるロラン・バルト』、佐藤信夫訳、みすず書房、1979年、140頁) .
- 6 俳句と「ニュアンス」のつながりに関しては、「小説の準備」と題してバルトが行なった晩年の講義のなかのとりわけ以下の箇所を参照のこと。Roland Barthes, *La Préparation du roman I et II. Notes de cours et de séminaires au Collège de France 1978-1979 et 1979-1980*, texte établi, annoté et présenté par Nathalie Léger, Seuil / IMEC, 2003, pp. 77-84 (『小説の準備 I・II——コレージュ・ド・フランス講義ノート1978-1979年度と1979-1980年度 (ロラン・バルト講義集成III)』、石井洋二郎訳、筑摩書房、2006年、73-84頁) .
- 7 以下の拙稿を参照。「ロラン・バルト『S/Z』における提喩的原理」、『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』、第19号、日本フランス語フランス文学会関東支部、2010年、197-209頁。
- 8 Roland Barthes, *Le discours amoureux. Séminaire à l'École pratique des hautes études 1974-1976*, suivi de *Fragments d'un discours amoureux* (pages inédites), avant-propos d'Éric Marty, présentation et édition de Claude Coste, Seuil, 2007. なお、このセミナーの記録を読むうえで、以下の文献は優れたガイドであると言える。桑田光平『ロラン・バルト——偶発事へのまなざし』、水声社、2011年、129-177頁。
- 9 Roland Barthes, *Fragments d'un discours amoureux* (1977), in *Œuvres complètes*, t.V (1977-1980), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 31 (『恋愛のディスクール・断章』、三好郁朗訳、みすず書房、1980年、11頁) .
- 10 *Le discours amoureux. Séminaire à l'École pratique des hautes études 1974-1976*, *op. cit.*, p. 371.
- 11 *Ibid.*, p. 291.
- 12 *Ibid.*, p. 379.
- 13 メタ言語の解体としての断章形式は、とりわけ「想像的なもの [／想像界] (l'Imaginaire)」と「象徴的なもの [／象徴界] (le Symbolique)」の関係性という点においても重要だと言える。Cf. Éric Marty, *Roland Barthes, Le Métier d'écrire*, Seuil, 2006, pp. 254-262.
- 14 *Le discours amoureux. Séminaire à l'École pratique des hautes études 1974-1976*, *op. cit.*, p. 61.
- 15 たとえば次の論文を参照のこと。Nicolas Ruwet, « Synecdoques et métonymies », in *Poétique*, no. 23, 1975, pp. 371-388.
- 16 Gérard Genette, « Style et signification », in *Fiction et Diction* précédé de *Introduction à l'architexte*, Seuil, coll. « Points », 2004 (1991), p. 197 (note 1) (『フィクションとディクション

- ジャンル・物語論・文体』、和泉涼一・尾河直哉訳、水声社、2004年、135頁（原注42）。
- 17 *Fragments d'un discours amoureux, op. cit.*, p. 131（邦訳150頁）。
- 18 *Ibid.*, pp. 197-199（邦訳238-241頁）。
- 19 *Ibid.*, p. 197（邦訳238頁）。
- 20 *Ibid.*, pp. 253-258（邦訳304-311頁）。
- 21 *Ibid.*, p. 228（邦訳276頁）。
- 22 *Ibid.*, p. 49（邦訳33頁）。
- 23 *Ibid.*, p. 188（邦訳224頁）。
- 24 *Ibid.*, p. 193（邦訳232頁）。
- 25 *Le discours amoureux. Séminaire à l'École pratique des hautes études 1974-1976, op. cit.*, pp. 402-403.
- 26 「肯定」の問題に関しては以下を参照のこと。Gilles Deleuze, *Nietzsche et la philosophie*, PUF, coll. « Quadrige », 2010 (1962), pp. 197-222（『ニーチェと哲学』、足立和浩訳、国文社、1982年、246-276頁）。また差異の生成としての「カへの意志」および永遠回帰については、この著作の第2章を参照のこと。
- 27 *Fragments d'un discours amoureux, op. cit.*, p. 53（邦訳39-40頁）。
- 28 *Ibid.*, p. 190（邦訳227頁）。